

74 塩見脩也と蘭方膏藥

中西 淳朗

神奈川県保険医協会

演者は以前より「膏方便覧」という古書を架蔵している。「膏方便覧」といえば、まづ華岡青洲口述本であるが、前者の内容は全く異り、巻頭に塩見流という書入れがある。この書には題簽、序文、跋文を欠いている反面、本文に朱点等が加えられ私塾用膏藥処方集というスタイルである。

たまたま金子功著『反射炉Ⅱ』（法大出版局刊）を読み、岡山大多羅反射炉の築造にか、わった医師・塩見小堂の墓が岡山市下阿知にあること、小堂の父脩也が華岡青洲に学んだ医師であったことを知った。しかし金子氏の著書には医史的記述はない。

平成十六年二月に発刊された国立歴史民俗博物館研究報告第一一六集に収載されている高橋克伸著「春林軒「門人録」について」、並びに同氏校訂「華岡家所

蔵「門人録」翻刻資料”によって、塩見脩也を調べたところ、「門人録」四五七番 文政元年八月廿一日 備前村久郡下阿知村 塩見脩也 請 日方浦仙右衛門を見出した。(村久郡は邨久郡の誤) つまり備前牛窓港に近い下阿知村から紀州海南港の廻船問屋(?)の主人を保証人として脩也は青洲の春林軒に入門したことがはじめて明らかになった。

塩見家一族の塩見雪子氏によれば、脩也の息小堂は反射炉を築造したもの、大砲の発射実験に失敗し、一族から六名の洋方医を出しながら明治になって絶家ないしは四散し、春林軒関連の資料は残っていないという。(中西作製の略系図を当日配布する)

そこで塩見流の「膏方便覧」について小研究を行ったので報告する。この古書は縦二四、横一六・四センチ、和綴、二五丁で、青鼠色の表紙に膏方便覧と墨書してあり、第一丁表の巻頭には膏方全書塩見流とか、れている。

これは膏方全書として書きはじめ、途中で塩見流を追記し、脩也が春林軒に学んだことに因んで息子の小

堂が表紙に春林軒の膏方便覧という標題を無断借用したらしい。

この塩見流膏方全書（今後この表記で統一する）の内容は、膏薬の部、膏薬の註、油水露取法の三部からなっている。

一、膏薬の部

これには十七処方が書かれているが、日常的な十方についてふれる。

a. インクエント・バジリコン（貴要膏、抗炎症膿用）
 b. エンフラスト・ムスラキニブス（粘活硬膏、抗炎症膿鎮痛用）
 c. インクエント・アルヒユル・カンフラート（樟腦軟膏、減腫和痛止痒用）
 d. インクエント・ヲヲリウン（油脂軟膏、打撲鎮疼抗ロイマチス用）
 e. エンフラスト・テレギル（万能膏、陳旧創打撲脚気用）
 f. エンフラスト・テヤパルマ（単鉛硬膏、種々の腫物、湿瘡、切創に）
 g. インクエント・エケビシヤコン（エジプト膏、腐強の腫物、化膿から潰瘍化するものに）
 h. エンフラスト・オシコロシヨン（さふらん硬膏、骨痛関節痛皆痛用）

i. インクエント・コルタール（鉍油軟膏、切創止血用）
 j. エンフラスト・ホリコス（白鉛硬膏、硬結をとり湿面を乾かす）等である。

右のうち、春林軒の流れをくむものは五処方で、a. b. d. g. i.（カスバル流）。長崎の吉雄家の流れをくむものは八処方で、a. b. c. e. f. g. h. 等（重複あり）で、残りの七処方は他より取入れたもので、比較的新しい処方が多いといえよう。

二、油水露取法の部

作用成分抽出法のこと、植物性油二八種、動物性油二種、鉍物性油六種、合計三六種が記され、九種の植物性油が追加されている。これらの採取法や用法については植林流に準じている部分が多い。たゞし植林流では製法秘で口伝に限られているものもあり（例えばナガラ油Ⅱ丁子実油）、植林一門でない限り自家製造は出来ない。従って製造の問題については不明という外はない。

〔註記〕 塩見小堂は高良齋の門人。